きらり

KIRARI

瀧内智子（たきうちともこ）さん（若山町）

今、皆さんが手に取ってご覧になっている『広報のぼりべつ』の内容を、視覚障がいをお持ちの方はどのようにして知り得ているか、ご存知ですか？

今年、創立30周年の節目の年を迎える『登別朗読ボランティアの会』では、毎月『広報のぼりべつ』の朗読テープを作成しています。同会ではこのほか、市議会だより『でぃすかす』や室蘭警察署からのお知らせの朗読、幼児や高齢者への読み語りなど、多様な朗読ボランティアに取り組んでいます。

今回は、同会の会長であり、朗読以外のボランティア活動も実践している瀧内智子さんに、ボランティア活動全般への思いをお聞きしました。

ボランティア活動を通じて得た財産は、かけがえのないもの。

昭和18年北見市生まれ。73才。
大学卒業後、道内各地の小学校で教師を歴任。鷲別小学校や幌別小学校でも教壇に立った。退職後、平成８年に『登別朗読ボランティアの会』に入会、平成11年度より同会の会長に就任。絵本を楽しむ会、絵本に学ぶ会の会長としても活動中。

言葉に正面から向き合う

「遠方に住んでいる高齢の両親が、周囲の人たちに助けられながら生活していく将来を考えると、私自身も人の役に立つことをしなければ、と思ったことですね」と本格的なボランティア活動へ取り組むこととなったきっかけを話す瀧内さん。ご自身の体調を考え、身体への負担があまりかからないボランティアを探し、『登別朗読ボランティアの会』に入会しました。

「教室で生徒に話しかけていたときは、声の大きさを使い分けるなど、対面する相手に伝わりやすい話し方を心がけていました。でも、録音機械相手に吹き込むとなるとまるで別のものでしたね」。

もともと教師として話すことの経験を積んできた瀧内さんでしたが、相手の反応が見えない中で行う朗読というジャンルに、新たな気持ちで挑戦したそうです。

朗読用の発声や滑舌の技術について、研修会などにも積極的に参加し学んでいき、技術を習得し経験を重ねていく中で、朗読の奥深さを実感した瀧内さん。

「技術的な部分はもちろん大切です。でも相手に文意を伝えるために最も大切なことは、朗読する側が文章の内容を、正しく、深く理解した上で朗読を行うことだと思います。理解しきれないままで文章を朗読しても、聴く人に正確な文意は伝わりませんね」。

▲朗読ボランティアを行っている様子

情けは人のためならず

瀧内さんは朗読以外にも、書道指導ボランティア、社会福祉協議会のボランティアアドバイザーとして、多彩な活動を実践しています。

「さまざまな活動を通じて得た、多くの方たちとの出会いが、人生の大きな財産です。また、活動の中でいただいた相手の方からの感謝の言葉などに、日々励まされています」とボランティア活動の喜びを教えてくれました。

ことわざの『情けは人のためならず』を体現しているような瀧内さんは、いただいた感謝をエネルギーに変え、元気な笑顔でこれからも活動に取り組んでいきます。